

# 空間表現に関する日中対照研究：認知意味論の立場から

|         |   |
|---------|---|
| 著者      | 鄭 若曦  |
| 学位授与年月日 | 2016-07-14  |
| URL     | <a href="http://doi.org/10.15083/00075172">http://doi.org/10.15083/00075172</a> |

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 鄭 若曦

本論文は、中国語と日本語の空間表現に見られる様々な共通点と相違点を手掛かりに、両言語の話者が空間移動事象に関連する様々な概念をどのようにカテゴリー化し、言語化しているのかについて、認知意味論的立場から比較対照したものである。

認知意味論的立場から空間表現を研究することの重要性を指摘した第1章に続き、第2章では、移動事象を構成する意味要素を紹介し、両言語がそれぞれどのような言語手段を持ち合わせているかをまとめている。第3章から第7章が本研究の主な考察と主張である。

第3章では、両言語で起点を導く「从(從)」と「から」が中間経路を導く場合にも使える現象に注目し、「从」の表し得る中間経路の範囲がなぜ「から」より広いのかに関して重点的に考察を行う。具体的には、従来の「領域間の境界」説の問題点を検討した上で、「从」の全ての中間経路用法を説明するには語源の「随行義」に遡る必要があると主張する。

第4章では、両言語の「从」と「から」を用いた取得構文(「太郎は花子から本を借りた」「太郎从花子那儿借了一本书»)に注目し、「から」取得構文が「从」取得構文より表しうる取得事象の範囲が広いのはなぜかに関して考察を行う。具体的には、「強制使役から許容使役への拡張」と「対象の物理的移動から取得対象の抽象的移動へのメタファー的拡張」が両言語でそれぞれどこまで許されるかという観点から説明を与える。

第5章では、移動物の位置を特定する「探索領域」に関する情報を、中国語は“装+进(来/去)”のように、非中核部(方向補語の“进(来/去)”)で指定する言語であるため、中核部に立つ設置動詞“装”は「探索領域」を指定しないのに対して、日本語は中核部に立つ設置動詞「詰める」自身が「探索領域」を指定する言語であることが明らかにされる。また、そのような両言語の「設置動詞」の意味の違いを考慮することで、“装在箱子里”「箱に詰める」に見られた両言語の相対名詞(“里”と“(の)中”)の有無の違いも自然に説明できると主張する。

第6章では、「場所格交替」を手掛かりに、移動物の位置変化と場所の状態変化を、日本語は中核部の動詞(「塗る」)で表現するが、中国語は非中核部(“塗”のあとにつく結果補語“上”“満”)で表現することが示される。また、日本語が「被せる」「覆う」のように、移動物の位置変化と場所の状態変化の片方を含意する動詞が多いのに対して、中国語の「他動詞+結果補語」からなる組み合わせ(“蒙+上”)は、より柔軟に場所格交替に参加できること、そのような認識の柔軟性は、動詞述語の凶地未指定性や、「行為+結果」で事態を分析的に語る中国語の「意合性」の強さと関係が深いことも指摘する。

日中語の様々な空間表現について認知意味論的立場から独自の分析を十分な説得力をもって提示することに成功した本論文は、両語の対照研究と認知言語学という理論に大きく貢献することが期待される。

よって、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものとの結論に達した。